

「第19回“本気”で語ろう会」 会議録

団体名	ちーむひかり
日時	平成27年9月1日(火)13時50分から15時35分まで
場所	リトミック教室とらいあぐる
参加者	ちーむひかり(岩松氏外7名)
	市長、市長公室長、生活環境課長、健康増進課長

1 女性目線・ママ目線で見える鹿屋市について

提案：数年前に岐阜県から鹿屋市に引っ越してきたとき、子どもの医療費の支払方法で違いを感じた。岐阜では患者と病院の間で現金のやり取りはないが、鹿屋市では一度病院で支払い、後から費用が返ってくる。一度支払う必要があることで、母子家庭の方などは大変である。他県で実施できていることが、鹿屋ではできないのかなと不思議に感じた。

回答：以前は小学生と中学生の入院のみ医療費を助成していたが、現在は中学生の通院についても助成を行うようにした。ただ、年間で1億3,000万円程度の費用が必要となる。助成の対象を高校生まで広げている地域もあるが、高校生はある程度体力もついており、小学生や中学生の方が通院に費用がかかることから、今のところ中学生までの助成としている。

また、助成方法について、鹿屋市では現物支給ではなく、償還払いという方法をとっている。医療費は県からも出ており、県に対し現物支給できないかお願いをしているが、県はあまり乗り気ではないようである。これは、医療費が無償となれば、少しのことでも医療機関を受診する人が増えてしまうという問題があり、現状のように、一旦医療費を自己負担することが適正な受診に繋がっているという考え方である。

方法として、所得の低い方や障害者の方などを区分けすることも考えられるが、今のところ、市としては現物支給について県にお願いしている状況である。

提案：3歳児健診のとき、視力検査キットが家に送られてくるので、親が検査を行っているが、眼科の医師ではなく親が行うことで、検査の精度が心配である。医師が行う目の検査は、小学校入学前の検査となり、その際に弱視等が発覚する。

特に、弱視については、3歳で見つけることができれば、その後に見つかるより治る可能性が高くなるので、3歳児健診のときに眼科の医師に検査をしていただきたい。

回答：目については、8歳までにほぼ出来上がるということで、本人が意思表示できるようになる3歳6か月で3歳児健診を実施し視力検査も行っている。この視力検査について親にお願いしている。

提案：子どもによって、見える見えないをはっきりいえる子と、そうでない子がいる。親の検査だけで判断するのはどうなのかなと思う。アメリカでは、弱視の検査

を医師がきちんと行っている。

回答（担当）：3歳児健診のときに、事前に自宅で親に検査を行ってもらい、会場でも問診のときに確認をとっている。また、目に関するアンケートも実施しており、必要に応じてスタッフが検査をやり直し、必要な方には医療機関受診用精密受診券を発行している。再検査に必要なスタッフも配置し対応している。就学前でもかまわないので、気になる方は保健相談センターに声をかけてほしい。

提案：弱視の子どもは、鹿屋市内では全体の何パーセントくらいいるのか。

回答（担当）：今データを持ち合わせていないが、鹿屋市だけが多いことはなく、平均的と思われる。また、市では母子健康手帳交付時に、子どもの目の健康チェックシートを配布するなど啓発している。

回答：鹿屋市の3歳児健診の対象者は、1学年に概ね1,000人いる。そのうち130人程度が健診時に要精密検査となり、うち100人は目に関しての精密検査である。何かあれば保健相談センターに相談してもらい、見逃すことのないようにしていただきたい。

提案：障害を持っていても病名がつかないグレーゾーンの子供達については、医療費助成がない場合があるので、ぜひ助成をお願いしたい。この子供の中には、IQは飛びぬけているが精神が不安定な子もおり、家庭によっては一人だけでなく何人かいる場合もある。病院の先生も診断名は出してくださるが、中々障害者手帳が取れないのが現状である。

また、障害の子を持つ保護者についても、子育ての中でたまにストレスにより発熱したり寝込んでしまうことがある。専門の施設に予約すればヘルパーさんに来てもらえるが、緊急時の手助けが必要な場合等の対応が難しい。事業所もギリギリで運営していると思うので、緊急の際の助成金などを市で検討していただけないだろうか。

回答：行政が障害の方を判断する際、障害者手帳で一定の線を引かないと、グレーゾーンの判断はできない。社会生活をできかねる方が障害を持った方だと思うので、判断するシステムをしっかりと制度の中で確立し、救済していかないといけない。

乳幼児であれば、医療機関に預ける制度はあるが、障害者の場合はどうなっているのだろうか。

提案：月曜日から金曜日は、障害者も預けられる施設がそれなりにあるが、利用者が多数おり予約しないと利用できなかつたり、多額の費用がかかつたりと、急に利用する必要に迫られたとき利用できない。

このため、今はずっと自分でみており、そういう施設を自分で立ち上げようと動いている。

回答：自分達が何を行い、そのためには何を支援してほしいかをはっきりさせると良いと思う。例えば、鹿屋市内にも空き家などがたくさんあるので、そういった所を使うことも可能だと思う。クリアすべき問題を明確にすれば良いのではないか。

提案：子どもを預ける場所はあるが、泊まれる場所がない。自分達でそういう施設を立ち上げることにしているが、本当に利用者が来るのかも心配である。市に相談しても個人情報で教えてくれないのではないかと思うので、施設の立上げの情報発信を手助けしていただきたい。

回答：例えば、様々な障害者のグループに、口コミで紹介していくのも一つの方法ではないか。

提案：今は、その方向で考えている。今回話をしたのは、市長に、このような施設ができるということを伝えておきたかった。

回答：知り合いにも、障害を持った子と親と一緒に住んでいる世帯があり自立支援の施設にも通っているが、将来親が亡くなってしまったらどうするのかという悩みがある。そうなったとき社会としてどうやって受け入れていくか、これは大きな問題である。障害者の自立の問題や疲れた親へのケアの問題、緊急時に利用できる施設のことなど全てが大切である。実態がどうであるかを調べて情報があれば報告したい。

提案：定期健診について、保健相談センターで母子相談があるが、相談に行った人が落ち込んで帰って来る。話を聞くと、「同じ世代の子どもと比べ 20 点」と言われたそうであり、健診はスタッフによって当たり外れがあるとの話も聞く。

親は、自分の子供の成長が少しの成長であっても嬉しいものである。それをそういう言い方をされると傷つくと思うので、もう少し心ある対応をしてほしい。市中でも職員同士声掛けをしていただきたい。

回答：市は窓口の数が多く、1人2人の心無い職員のために市役所全体が同様に見られてしまうのは辛い。職員間でミーティングしながら情報を共有し対応していきたい。今のお話は参考にさせてほしい。

提案：リナシティについて、中に入っている社会福祉協議会はとても対応が良いが、まちづくり鹿屋は対応が悪く挨拶のできない職員も多い。市に相談したら、市から指導があったようで対応が変わったが、借りる方としても職員の機嫌を取りながら借りないといけない。

また、お願いや相談をしても、お客さんの都合ではなく、自分達の都合で対応する。都城市にはリナシティと同様の施設で、ウエルネスという施設があるが、この対応は最高に良い。

提案：市民講座について、受講したい皆さんが市報の一覧を見て来るが、鹿屋に転勤して来た人達は他地域に比べて講座が充実していると言っている。また、子育てしながら住み易いまちとのことであり、鹿屋への転勤で良かったとの声も聞く。

提案：動物愛護の観点で見ると鹿屋は酷い状態である。保護活動家の人達からすると、大隅という字を見ると顔をしかめる。この地域は、人口に比べて殺処分が多く、動物の命を何とも思っていないようである。

猫を飼っている家庭の子どもに、赤ちゃんが生まれたら猫はどうするのと聞くと、父が山に埋めるから大丈夫と言っていた。小さい子どもがそう言うのである。

私の所属グループは、自腹で去勢や避妊をして里親を探す活動をしている。そうすると、知らない人からも電話があり相談されるが、活動にも限界があるので、市の生活環境課にも通って相談している。

回答：一時期は、一軒家に住むと犬を飼う事がステータスになっていたように思うが、結局子どもは飽きるので、親が面倒をみる事になる。動物を飼うときは、本当に動物が好きなのか、動物を飼う資格があるのか、中途半端な気持ちではなく、最後まで思いを持って飼う事が大切であり、そのための心構えを啓発しないといけない。

昨年、霧島市の隼人に鹿児島県動物愛護センターができた。牧之原にある始良動物管理所に集められた犬や猫の中から、譲渡可能と判断された犬猫が動物愛護センターへ送られて、犬猫を飼いたい人に譲渡される。このような取組もあり、近年の状況でいうと殺処分は減ってきているようである。

回答（生活環境課長）：殺処分が減ってきているのは事実であり、市でもホームページにより啓蒙している。また、ワンキャンネットとも連携して譲渡会をするときに市で広報したり、愛護週間を見据えてホームページ等で啓発・広報するなど取り組んでいきたい。

提案：市長には、ぜひ殺処分0を宣言してほしい。

回答（生活環境課長）：平成26年度に熊本市や札幌市、神奈川県が殺処分0を達成しているようであり、犬猫に名札（迷子札）をつけるなど取り組んでいる事例はある。

提案：特定の保護団体に助成金を出しているとの話を聞いているが、一部の保護団体のみに助成金を出すのは良くないのではないか。

回答（生活環境課長）：保護団体に対して、市からの助成金というものは出していない。市が実施しているのは広報紹介などの後援支援のみなのでご理解いただきたい。

回答：昔は農作業等のために動物を飼っていた。今は愛玩のために飼っているので、

大切に可愛がってあげないといけない。例えば、農作物でも主要作物には補助金等があるが花にはほとんどない。愛玩動物を飼うことは、食べて生きるためではないため、飼う人が責任を持って飼育することが必要ではないかと思う。

提案：飼われている動物はそのとおりだと思うが、野良犬や野良猫の処置に対する助成は必要ではないか。野良犬や野良猫を増やさないようにするための対策として、例えば獣医師会の了解をもらった犬猫には避妊手術の助成をするなど検討してほしい。

回答：愛玩動物を癒しのために飼っていると考えると、飼う人が経済的な負担まで意識を持って飼うべきである。自分の子どものように可愛がって、葬式まで出す人もいる一方で、山に埋める人や捨てる人もいる。人それぞれではあるが、一生をみてあげる気のない人は動物を飼うべきではないのではないか。ただ、外をうろついている犬は本当に少なくなったように感じる。

回答（生活環境課長）：保健所に保護される犬は、ここ3年間で2割程度減った。また、飼い主からの引取犬は63頭から32頭と5割程度減り、殺処分も188頭から75頭と6割程度減っている。殺処分等の削減については、県でも目標を立てて取り組んでおり、市としても啓蒙について一生懸命頑張りたい。

2 映画上映会の開催について

提案：鹿屋市社会福祉協議会により上映された「うまれる」という映画があるが、この映画のモデルになった産科医の池川先生が、胎内記憶について取り組んでいる。胎内記憶とは、2～3歳の子が話す生まれる前の記憶で、これをモチーフとしたドキュメンタリー映画「かみさまとのやくそく」の上映会を自主的に行うことにしている。

この映画は、子ども達はママを自分で選んで生まれてきたという話で、全国的に人気であり、この映画を見るとお母さん達が元気になれる。また、配給元に上映会の相談をしたら、映画監督と池川先生も鹿屋に来てくれることになった。文化会館で開催するこのイベントに1,000人来てもらえれば、鹿屋市のお母さん達の意識も上がると思う。なお、ユーチューブでも予告編を見ることができる。

鹿屋市にお願いしたいことは、後援をいただきたい。これにより市の施設や学校、市内のお店にもポスターを掲示できる。このイベントを機に意識の高いお母さん達のネットワークをつくり、今後のイベント等に繋げていきたい。

回答：自主的な取組なので、ぜひ応援したい。後援の申請については、関係課に出してほしい。また、この映画を見たいという思いのある父母により、志のある人を集めて開催してほしい。

提案：今までもいくつかのイベントを開催しており、人は集められると思う。ただ、

ポスターを見た人たちが市の後援が入っていると安心するので、ぜひお願いしたい。

回答：子どもを生むお母さんのご苦労と、子と母の関係を考えると、男性も見るべきだと思う。

3 その他

提案：鹿屋市の産科医の確保の状況についてはどうか。

回答：今、一生懸命取り組んでいるので、良い報告ができるようにしたい。

提案：卓球連盟に入っており、九州大会や全国大会に行くが、市に助成を申請する手続きが他の地域に比べて難しく感じる。

回答：体育協会で取り扱っているので、手続きの実態を調べて報告する。

提案：障害者用のリフト付き車両への助成はないのか。

回答：国や県など色々な制度があるので、調べて報告する。

市長総括：今日は皆さんの色々な悩みや、私の知らない世界を教えていただいた。今、女性の能力を活用するため女性登用を進める動きがあり、行政でも審議会等の役員の内3割は女性を入れることなど取り組んでいる。民間においては、社会の雰囲気が変わらないと難しい面もあると思うが、どんどん女性に出てきてほしい。

また、鹿屋市は自衛隊や企業の支店などがあり、転勤族のまちでもある。若い人たちが転勤して、前に住んでいたまちと比較されたとき、行政レベルが他地域に負けないように、外から見た鹿屋市や女性目線も大切に、住みやすく子育てしやすいまちづくりに努力したい。